

よるいびと生活

一。その人の才学で人を動かそうと思えば、ある程度までは動かすことが出来よう。しかしその次にはぱったり止まる。何故とまるのであろう。よく気をつけてみれば、その人が動いていない。

長く／＼世道人心を動かしている人は、法の命ずるままに自ら動いた人である。自らは動かさず、他人のみを動かそうとするところには、焦燥と怒りがつきまとう。人からみれば邪見としか見えない。

ねじがかかって来て、一つ車が動けば、時計の機械全体が動くように、一人真に動くことよって自然に周囲が動くのを徳というのであろう。

一人真にず抜けて御法を喜ぶ人があれば、必ず、その周囲には喜ぶ人が出来、真に道を行ずる人があれば、必ずその足跡には道の華が咲く。

一。指導的立場にある人が、いくら聞法するようでも、単なる学解におわるならば、その周囲には何時までたつても尊い華が咲くものではない。念仏を喜び、道を楽しむことが出来た時、自然に道は開けて来よう。

一。「通り一ぺん」という言葉がある。語の釈はどういうことであるかよくわからないうが、魂がこもっていないことであらう。通り一ぺんの挨拶、通り一ぺんのお礼、通り一ぺんの言葉と、魂がこもっていない、生きていないものは、人をもまた生かさな¹い。通り一ぺんという言葉ほど嫌なものはない。

大方が通り一ぺんのことばかりである時、真の念仏の同胞の一口は胸にせまることである。

「有難う御座います。」短い一言ではあるが、美しき人間生活の基調であると思われる。あるいは一代に一度もこの一句を心の底から口にしたことなく、人にも捧げたことなく、自らも言ったことなくして、世を終る人があるかも知れない。

近頃、私は涙と共に「有難うございます」と真に感謝する人に大きな驚きを感じている。これのみ、自他一切を動かす力である。

一。山海の珍味も、胃腸が悪ければ頂くことは出来ない、したがって、如何なる御馳走も感謝の種とはならない。心臓が病んでいる時も同一である。心に自力我慢の病があれば、如何に真実の大法も、久遠の真理も、これを受けつけるものではない。したがって「有難うございます」との感謝の情は湧いては来ない。小は家庭の内部から、大は国家まで、生かすか殺すかは、この一語にある。一切のものは「有難うございます」の一語よって生かされる。「有難うございます」と国家に捧げるこの至情が忠の本質であらう。

一。子供のすることを喜んでやらぬ親。有難うございますと、喜ぶ心をつちか培い育てずに大きくして子供を世の中に出すと、この子が大人になった時、人の上に立とうが、人の下にっこうが、必ず、その行くところを暗くする人になる。

多くの場合、大人の精神的病源は子供の時に植えつけられる。

一。金を握らすか、酒を飲ますかしなければ喜ばぬ人間、名利権勢か、人間の享樂以外には喜びのない人間、この貧しい人間の心は、何時、誰が植えつけるのか。教育は神聖である。しかし時には殺人ほど恐ろしいことである。思い至ると心が暗くなる。世の教育者よ、教育学に火は燃えているか。

一。大人の心から割り出さねば教育はない。しかし子供になつてやらない冷たい功利的な心からの、氷のような監視や律法で、そのすべてを縛ることは、他日の大患の種を播くに等しい。冷たい百の訓戒よりも、学校から帰った時の「ただ今」の声に、心から「お帰り」と応えてやるこぼれるほどの温い母の声の方が、どれほどこの子の将来を大きく伸ばすか知れない。大きく太る力を持った木には一寸鋏を入れたら立派になる。こぢくれた木は如何とも出来ない。

子供一人を真に動かす母は偉大である。

一。一切の母よ。子供の前で、夫に喰いかかったり、鬼になつて見せたりしてくれるな。幼い日の印象は、五十になつても、思出す度に心が暗くなる。大悲の御心に撰められて念仏して、子供に接してくれ。

一。心霊の故郷のない者は流転する。子猫の時、懐で大きくされた猫は、悪いことをして、頭をたゞかれても逃げはしない。野良猫は、餌を持つて招いても飛んで逃げる。子供に美しい楽しい思い出を作つてやれ。弊害のおきない限り。ある母は「私は子供が家に帰る時、必ず家にいるようにしてやります。」と言つた。この母の子だけには保証が出来る。如何に大人になつても、母の胸が、心の故郷であり、遠くへ手ばなしても墮落しないことを。

一。笑いのない家庭、おかしき、滑稽こっけい、諧謔かいぎやう、そうした要素の欠けた家庭、嬉しい、有難い、楽しい、そうした言葉の不必要な家庭、そうした家庭の中からは、たいがい何かの形で家庭か国家かが、高い高い治療費を負担しなければならぬものを出すであらう。

「有難うございます。」恩徳報謝の情のこぼれない仏法、それは、時に、一笑にも値しない場合がある。感謝がこぼれなければ高慢がみなぎる。仏法を聞いてこうなる人を二乗という。

一。心が冷えれば、万人ことごとく凍って氷の如く硬化する。それが鬼であり、蛇であり、罪障である。心が融ければ、万人ことごとく社会を生かす光となり、人格となる。大慈悲の前ののみ、

「罪障功德の体となる 氷と水のごとくにて

氷おほきに水多し 障りおほきに徳多し。」

と大乘至極と言われるところの円頓の世界が開いてくる。

浄土の真宗、念仏の世界とは、如何なる悪人、凍りきった極重悪人の上にも、春風駘蕩の春をもたらす。本願円頓の世界である。

一。温かい春の心に蘇った人は誰でも子供心になる。慈悲の乳房にとりすがった子心は、純そのものである。七十になっても、この幼心おんなこころにかえりたいのが人の心である。であるから聖人は念仏の心を「子の母をおもふごとくにて」と仰せられた。

一。「道光明朗超絶せり 清浄光仏とまをすなり

ひとたび光照かふるもの 業垢をのぞき解脱をう。

慈光はるかにかふらしめ ひかりのいたるところには

法喜をうとぞのべたもう 大安慰を帰命せよ。」

道は光る。明朗に輝く。その光こそ、清浄光であり、歡喜光であり、智慧光である。慈光はるかに撰取するところ、大慈悲のとどくところ、そこに道は生れる。「有難うございます」と、頭の大地につくところ、法喜の泉は湧き出で、安穩の境にあらしめた3もう。光のいたるところには業垢はのぞかれ、よろこびは訪れる。

何故に引きずる重い足ぞ。何故に灰色に曇る暗い心ぞ。心の垢を如何にする。

急いで真実教を求めて走れ。そして、「有難うございます」と、法喜の泉に遇うまで求めぬいてゆけ。歡喜のうちに道は生れる。道は光る。そこにのみ安らかさがある。仏は大安慰である。

一。Sさんは涙ぐみつつ私に語る。

「先生。有難うございます。どうしても御恩の報じようがありません。もとのままの私でしたら、こんな重い荷物の中におかれて、愚痴ばかりにまつ暗な心で、身動きならぬ苦の中に立っているではありません。おかげで、毎日足を軽く生きさせて頂いているのでございます。」

と純情そのものをかたむけて語るSさんである。自らが播いたのでもない重い荷物を一身に負うて、明朗に生ききっているこの人である。もし食欲にものを言わせれば、一生は台なしであろうはずのこの人が、念仏一つに生きているが故に、重い荷物もこの人を輝かす桧舞台となつている。誰も彼もこの人の前には頭が下る。念仏のある人もない人も、この人に接する限り鬼にはなれないであろう。村の光と輝いているこの人には、万金といえども、以て托すべし。

「道光明朗超絶せり。」業垢を洗う清浄光、歡喜を廻向する歡喜光、光のいたるところ、宿業を超えての無碍道が開く。もしこの人から、「有難うございます」との心も言

葉も取り除いたら何が残るだらうと、耳を傾けて聞き入りつつ思われることではある。教えを聞くことより外に何も求めず、報酬も願わぬこの人を、心の中に挿んで涙をおさえる。

一。心が荒れはてて沙漠のようになればなるほど、貪欲、瞋恚、愚痴の、三毒三垢のみが頭をもたげて、邪見傲慢の病はつのも、無人空迥の灰色な荒野にゆき詰まるであらう。真実の教えに遇うた者のみ、沙漠の中につきせぬ喜びの泉によりがえる。

現実の自己がどんな苦境におかれていても、必ず、この泉の恵まれることだけは確かである。しかし映画を見にゆく時間はあつても、仏法を聞く時はなく、自暴自棄に陥ってヤケ酒に家を空ける金があつても、法を聞く気のない間は、どんなにもがいても、灰色の大地は続くであらう。そしてその心のまゝで、一、二席聞いて見て、「どうもわからない」と捨ててしまふ間は、人生は味気ないものであろう。

「有難うございます」魂の底から言えそうなこの一語が、なかなか言えないことではある。そこには超えねばならぬ多くの世界がある。今更に、宿善開発という言葉の意味を思うことである。

一。「有難うございます」と感謝するところに一切は生きる。妻の感謝に夫の一生が生き、夫の感謝に妻の一生が生きる。この院主にして真に生きたら、この村が、この町が真に生きるであらうと思われる場合がある。この院主の奥さんにして真に生きるならば、この院主の仕事はすべて生きるであらうのにと思われる時がある。一人の4婦おんなが台所の隅でくすぼっている冷たさが、夫の描く書に墨をぬり、それがやがて一村に広がってゆく。一口、大地に五体投地して、「有難うございます」と言つてほしい。真実の教法よ、この人の耳に入りたまえかし。

十方衆生！と呼びかけたもう大悲の悲しみがひしひしと念われる朝である。一切の経緯いきわづらひを越えて大悲の御意に帰らして頂こう。